

七条中学校だより夏休み1号

京都市立七条中学校

令和8年7月30日

発行：校長 林 秀雄

今、熊本で起きていることを自分事として

7月28日、熊本県を震源とする大きな地震が発生しました。最大震度7を観測し、多くの地域で建物の倒壊や道路の寸断など大きな被害が報じられています。現在も余震が続き、多くの方々が不安な時間を過ごされています。

テレビや新聞、インターネットのニュースを通して、その様子を見た人も多いことでしょう。画面に映し出される街並みや避難所の様子を見ながら、胸が痛くなった人もいるかもしれません。また、「大変なことが起きている」という気持ちはあっても、遠く離れた京都で生活している私たちには、どこか現実感が持てないという人もいるでしょう。それも自然なことです。しかし、その一方で忘れてはならないことがあります。

それは、被災地で困難な生活を送っている方々も、昨日までは私たちと同じように当たり前の日常を過ごしていたということです。被災された方々の中には、皆さんと同じ中学生もいます。夏休みの計画を立てていた人、部活動の大会や練習に励んでいた人、家族と出かけることを楽しみにしていた人もいたことでしょう。友達と笑い合い、家族と食卓を囲み、明日の予定を考えながら眠りにつく。そんな何気ない毎日が、突然の大きな揺れによって大きく変わってしまったのです。

私たちはまず、「もし自分だったらどうだろう」と想像することが大切です。もし自分の家が大きな被害を受けたらどうでしょうか。家に帰れなくなったらどうでしょうか。大切な思い出の品や写真、普段使っている教科書や制服が使えなくなったらどうでしょうか。友達や家族の安否が分からず、不安な時間を過ごさなければならなくなったらどうでしょうか。実際に体験していなくても、その人の立場に立って考えようとすることはできます。そして、その想像力こそが、人を思いやる心の出発点です。

私は皆さんに、被害の大きさだけを見るのではなく、その向こうにいる一人ひとりの人の存在を考えてほしいと思います。数字で表される被害者の数ではなく、その一人ひとりに生活があり、家族があり、夢があり、かけがえのない時間があつたことを忘れないでほしいのです。

そして、もう一つ考えてほしいことがあります。それは、「今の自分に何ができるだろうか」ということです。中学生である皆さんが、すぐに被災地へ行って復旧活動を行うことはできません。しかし、できることは決して少なくありません。正しい情報に関心を持つこと。被災者の気持ちを思いやること。家庭で防災について話し合うこと。避難場所や避難経路を家族と確認すること。非常時の持ち出し品について考えること。節電や募金など、自分にできる支援を考えること。こうした行動は小さなことのように思えるかもしれませんが、その小さな一歩が、防災意識を高め、誰かを支える力につながります。

また、災害が起こるたびに、根拠のない情報やうわさが広がることがあります。善意のつもりで情報を広めた結果、被災地に混乱をもたらしてしまう場合もあります。だからこそ、情報を受け取る側である私たちは、「本当に正しい情報なのか」を考える冷静さを持つことが大切です。

今回の地震は、私たち自身にも大切な問いを投げかけています。日本は世界でも有数の地震多発国です。京都も決して例外ではありません。災害は「いつか来るもの」ではなく、「いつ来てもおかしくないもの」です。今日、熊本で起きていることが、明日、京都で起きないという保証はありません。だからこそ、防災訓練を真剣に行うこと、家族との連絡方法を確認しておくこと、自分の命を守る行動について考えておくことが重要です。災害への備えとは、不安になるために行うのではなく、自分や大切な人の命を守るために行うものです。

私は七条中学校の皆さんに、人の苦しみに心を寄せることのできる人になってほしいと願っています。そして、困っている人のために何ができるかを考え、行動できる人になってほしいと思います。それこそが、本校が大切にしている「人を大切にする心」であり、社会の中で信頼される人へと成長していく第一歩だからです。今こうして学校へ行けること、家族と過ごせること、友達と笑い合えること、安心して眠れること。私たちが当たり前と思っている毎日は、決して当たり前ではありません。だからこそ、今ある日常に感謝しながら、一日一日を大切に過ごしてほしいと思います。

最後になりましたが、被災されたすべての皆様に心よりお見舞い申し上げます。そして、亡くなられた方々に哀悼の意を表するとともに、被災地域の日も早い復旧と復興、そしてすべての方々が再び安心して暮らせる日が来ることを、心から願っています。